



法の光 (法光山 妙勝寺 通信)

No.256

2021年(令和3年) 4月 1日発行

文責 大岩 清人

—朝日の本堂半鐘—

花の春彼岸法要

梅から桃へ、そして桜へと移り、世界が明るく彩られてゆきます。春の匂いが漂う中、3月23日結岸けちがん(彼岸を結ぶ日を結岸といいます。)に春の彼岸法要を執り行いました。古来よりお彼岸を迎え、春の陽光と温かさを感じ、生きる喜びとともに、亡くなられたご先祖を偲び墓参りをされてきました。



申し込み頂いた塔婆を読み上げ、塔婆を並べて皆さんに水向供養して頂きました。

「最期の一念に依^{より}て、善^{しよ}悪^{ひく}の生を引といへり」(太平記)

時代劇の一場面。年老いた旅人がどうしても江戸へ行き、なさねばならぬ事があると病を押して旅籠を出立する前の晩に、武士が「最期の一念に依^{より}て、善^{しよ}悪^{ひく}の生を引といへり」と言う。すべきことがあるなら私がお伴をしよう・・・」と老人に語るのです。「最期の一念」とは「臨終前の思い」でもあり「人生の行い」でもあります。「善^{しよ}悪^{ひく}の生を引といへり」とは「善^{しよ}悪^{ひく}の後生(来世)を左右する」ということです。

老人に武士は「臨終を前にして江戸でしなければならない事を成し遂げようとする思い(行い)が、来世に良い世界に生まれ変わるか、悪い世界に生まれ変わるか・・・どちらにしろ成し遂げよ。」とアドバイスしたことになります。

この言葉の裏には浄土思想があるようです。浄土教では亡くなった後、極楽浄土に生まれ変わる(極楽往生)ことが目的です。その浄土に生まれ変わるか、地獄に行くか・・・臨終に際して、一心に佛を念ずること。特に阿弥陀佛を念じて極楽往生を願うことなのです。人の行いが善^{しよ}悪^{ひく}の生を引くかどうかはさておき、人の行いは3代(子や孫)にわたって因果応報があるのです。

「私即決しないようにしています。」

永代供養納骨堂「日光殿」への納骨を考えられている方が相談に来られました。「主人を縁のある神戸の寺院に納骨しましたが、年をとってお参りに行くのが無理になりました。私は山崎の生まれで親戚もいますし、息子が5年後に山崎で一緒に住むから・・・と言ってくれているので、妙勝寺さんへ遺骨を移そうと思ひまして・・・」という内容です。

「わかりました。日光殿を見て頂き、息子さんと相談して決めて下さい。」と日光殿に案内しました。「ありがとうございます。見せて頂き気に入りました。明るく春には枝垂れ桜も咲き、庭に面して良いところですね。」「気に入って頂かないとおすすめしません。」「今日の報告を息子に話します。息子がニュージーランドに赴任していますが、毎週末にテレビ電話をしてくれます。私が気に入れば同意してくれると思いますが、即決しないようにしています。チョット時間をおいて考えないと年をとって失敗することがあるように思います。」

「大切な心構えですね。」「思ったまま話したり、行動すると人様にいやな思いをさせたり、失敗したり誤解を生みますから・・・。森喜朗オリンピックの会長さんも軽々しく口にされたことで周りをいやな気持ちにさせたでしょ。年取ると言葉を選ばないとね。つい思ったことを口にするようになるの・・・。」

「即決しない。を皆さんにお伝えします。」とその日の相談を終えました。

「この子は天から降りてきたんです」

「お葬式は来世への旅立ちですよ。魂として生き続け、また違う身体に宿して生まれ変わる。輪廻転生です。如来寿量品第16の滅不滅と言う言葉で表されます。」と枕経でお話をして如来寿量品第16を遺族と読みました。

お通夜の後、「実はこの子が生まれて話しができるようになった2歳くらいの時に、子供として生まれたいと天から降りてきた・・と話したのが忘れられません。」
「妹の方はお腹にいる時のことを話してくれました。」

「お寺でお葬式をしてやりたい・・」と言う申し出で本堂で執り行いました。通夜の後、お酒を下げて家族と吊い酒をした時の話です。ゆっくりお話が出来ました。本堂での葬式は会館に比べて快適ではありません。しかし、会館では出来ない吊い酒で夜伽話ができるのです。遺族・親戚の方の思いも乗せて故人をお送りできたのです。親戚の方が「とても丁寧で良いお葬式でした。」と最後にお礼を言って帰られました。故人はどこに生まれ変わられるでしょう・・。

焼き芋

冬になると軽トラックに釜を積んで焼き芋を売りに岡山の美作から来るおじさん(実はおじいさんである)がいる。ピーという音をならして周りに知らせる。お寺の近所でも次々に買いに出てこられる。安くて美味しい。

気さくな人で短い立ち話をする仲になり、毎週楽しみにしている。「雨の日は売れん。そやから休みじゃ。」という話をしてから3週間、ピーという音がしない。しっとりとして香ばしい焼き芋でお茶を飲む楽しみがない。

今日も来ないのかな～と思って失望しかけた時、遠くからピーが聞こえてきた。「良かった。焼き芋が食べられる・・ことより、おじさんが元気で良かった～。」と小銭を準備した。



左の花は貝母はいもといいます。編笠百合あみかさゆりとも言うそうです。父が気に入って、檀家さんの家から株分けしてもらった物です。消えかかっていた花が今年になって各所で芽を吹き、白い清楚な花を咲かせてくれました。何故今年になって多く咲いてくれたのか不思議です。庭の片隅につつましく咲く姿は愛らしく心癒やしてくれます。色々な花がそれぞれに花咲き実を実らせます。

山崎幼稚園が閉園

大正10年(1921年)に開園され100年を迎えたのですが、園舎の老朽化により3月をもって閉園しました。

園児は城下幼稚園に通うのだそうです。

皆さんの中にも卒園生が多いことでしょう。

初代園長 原先生の銅像が裏庭に建てられたのが、お亡くなりになられた昭和34年6月1日から半年後の12月18日です。当時の木造の園舎は建て替えられ、かつてのたたずまいはありませんが、八幡神社側の裏庭には今も原先生が園児を見守っておられます。

その時代・その世代で山崎幼稚園の思い出は違うでしょう。

お昼にお弁当を温めてもらったこと、冬は竹馬で走り回ったこと、運動会ではチャチャチャ・チャチャチャ・チャチャチャ〜というリズムでおみこしと獅子舞が練り歩いたこと、紅葉山へ上って遊んだこと、誕生日会で鯛の形のプレゼントをもらったことなど、断片的にその光景が思い出されます。

私の子供達も山崎幼稚園に通い、先代(一妙院)から3代通ったのです。

入園希望の減少も関係しているでしょう。夫婦共働き世帯にとって、長い時間子供を預かってもらえる保育園への希望が増え、幼稚園希望者が減ったのも仕方ない流れです。

山崎中学が山崎西中学となり、3月で山崎幼稚園の名が消えてゆきました。残るは山崎小学校と山崎高校となりました。旧町内の中心部から子供の声が徐々に消え、周辺部に新しい家が建って、ドーナツ化が目立つ山崎です。



(100年 園児を見守られた原先生)

「誤字発見」

息子からのメール。写真が添付されていた。よく見ると法の光255号の現役シルバースキーヤーの文章である。拡大されているところを見て「あちゃ〜気がつかなかった。」『週末はやっていますので・・・』を『終末はやっていますので・・・』として印刷していた。

あらためてお詫び致します。

誤字のことで息子も目を通してきていることに、喜びを感じました。